

3 各事務室報告

3.1 図書館総務事務室

図書館総務事務室は、図書館全般の予算管理、契約、委員会運営等の庶務業務、経理業務、図書受入・整理業務、雑誌業務、図書館システム関連業務、及び特別資料などの大型コレクション資料、洋雑誌・電子資料の契約業務を含め、図書館の管理運営業務の大部分を担当している。また調達依頼、理事会審議案件の上程など学内関連部署との連携・調整業務全般、学内諸手続き関連業務、さらに各種関連学外団体との渉外業務等、対外関係業務も担当している。なお2014年度は、2013年度に続き、資料予算縮小のため特別資料費、図書館基礎資料費による高額資料の購入を見送った。このことにより高額資料の購入がなく、その他該当する補助申請項目がなかったことにより、例年行っていた補助金申請業務は発生しなかった。

また、2009年度から、明治大学東京国際マンガミュージアム（仮称）設置計画に関する業務、その先行施設としての米沢嘉博記念図書館、現代マンガ図書館の運営も上記図書館総務業務と兼務している。これらマンガ関連の業務は本報告書の対象外であるため省略するが、このために必要な人員手当ては行われておらず、図書館総務事務室全体として見ると、非常に厳しい少人数下での業務遂行が続いている。

(1) 除籍及び廃棄

図書館図書管理規程に基づき資料の除籍作業を毎年定例的に行っている。2015年度は前期に3,018冊、後期に2,815冊、合計5,833冊を除籍した。毎年1万冊の除籍が目標であるが、それには届かなかった。書庫の狭隘化が非常に大きな問題になっており、計画的かつ有効な除籍計画立案、実施を実現したい。

(2) 資産管理の適正化

図書館図書管理規程に基づき、金額に関わらず長く保存・使用する図書は、固定資産として計上しなくてはならない。財務課は、図書費執行金額の合計によって資産の増加を把握しており、図書費執行金額の合計が有形固定資産図書の資産金額となる。本来図書館作成の図書原簿で資産計上する金額と、財務課で把握している図書費執行金額は一致するはずであるが、2006～2007年にかけて、図書原簿をもとに原簿データの遡及入力を行い、貸借対照表と図書館原簿データベースの金額の比較を行った結果、30億円以上の差異が生じていた。2007年の法定監査の際に、この金額の差異の問題を指摘されたが、いまだに完全な解決に至っていない。

この問題を解決するため、2014年度より図書館総務事務室のシステム、受入・雑誌、経理、電子、マンガ図書館の各担当者及び図書館総務事務長をメンバーとして資産管理MTを編成した。2週間に1度程度会議を開催し、法定監査による指摘事項を中心に、金額の差異の原因説明及びその対処方法について検討した。2015年度は、単年度での図書館と財務課との資産金額の一致を目指し、調整を行った。2016年2月26日（金）開催の合同職場研修において、図書館の資産管理問題について報告を行い、図書館職員に対し、図書館における資産管理の重要性及び現状問題について共有化を図った。

(3) 国際大学からの研修者受入

明治大学と国際大学（新潟県南魚沼市）は、系列法人化の協定を2013年に締結しているが、この協定に基づき長期の職員交換研修を行ってきた。2015年度の研修者は、年度初めから2015年いっぱい就職キャリア支援事務室で研修を行い、その後年度末までの3か月間、図書館総務事務室で研修を実施した。主として電子資料契約のための各種調査業務を担当していただいたが、研修者は、国際大学の図書館が本務ということもあり、このため様々な意見交換、情報交換を行うことができた。

(4) 防災に関する検討

週1回行う図書館総務事務室の定例ミーティングの中で毎回一定の時間をとり、災害への対処に関する検討を、2013年から始めた。大地震をはじめとする災害の発生に対し、図書館でどう備えるべきなのか、また自分を守るために何を考えなければいけないのかを話し合い、また先の東日本大震災で大きな被害にあった宮

城県図書館、東北大学附属図書館の視察を行った。

また図書館紀要「図書の譜」第20号（2016年3月刊行）の特集「東日本大震災と図書館」は、このようなこれまでの検討により発案されたものである。

図書館合同研修では、「図書館における防災の取り組み」と題して、宮城県図書館、東北大学附属図書館における防災関連の取り組みについての報告、図書館スタッフの意識調査結果、地震発生時の危険個所を探すグループワークを行った。研修には大学全体の防災を担当する総務課の職員も招き、図書館内に起こり得る危険について情報共有を図った。その結果、合同研修時のアンケート結果に基づき、大学予算から拡声器や懐中電灯など、防災時に必要な備品を購入することができた。

(5) 目録・装備業務委託

目録・装備委託業者は2010年度に一斉に切り替わり6年目を迎えた。毎月定例会を開催し、実績報告、業務効率アップ、品質維持向上等について協議している。6年間の継続業務により、当館の要望レベルに確実に近づいているが、一斉に切り替わる可能性のある委託業務を安定させていくためには、職員のスキルも高くなければならない。業務委託への依存度が増す中、人材育成の課題が残る。

(6) 城市郎文庫

図書1,277冊 雑誌119タイトル（752冊）の目録・装備を行った。

発禁図書/雑誌について、典拠文献を確認し、その調査結果を書誌記述に反映する作業を行った。2016年度は冊子体目録を発行予定である。

(7) クリスチャン・ボラック コレクション

和図書900冊 洋図書110冊 洋雑誌223タイトル（2,442冊）の目録・装備を行った。

洋図書・洋雑誌は2015年度で終了。2016年度は和図書・和雑誌の目録・装備を行う予定。また、2014年度に引き続き、絵画・写真等の非図書資料のアーカイバル容器の製作及び一部資料のデジタル化を行った。

(8) 志田文庫

公益財団法人損害保険事業総合研究所より、本学第5代総長志田鉦太郎氏旧蔵書2,937冊（和図書1,713冊 洋図書1,224冊）の寄贈があった。これは、すでに生田図書館保存書庫に収蔵されている「志田文庫」約6,300冊を補完するものとなる。2015年度は、洋図書666冊 和図書81冊の目録・装備を行った。2016年度も継続予定。

(9) 特定課題推進費購入資料への対応

経常予算以外で購入された以下の資料の目録・装備を行った。

開設経費 国際日本学研究科（226冊）

グローバル・ガバナンス研究科（106冊）

(10) 図書受入・検収業務

図書予算減額の影響もあり、受入数は減少した。指定書店方式の受入は、昨年度同様、安定して稼働しており、スムーズに検収を行うことができた。会計監査、内部監査で指摘があった業務フローの改善は、一部であるが着手することができた。残る課題は来年度以降に改善する予定。

(11) 雑誌整理・受入業務

冊子体から電子媒体への移行や、機関リポジトリで公開されているものの受入中止などに伴い、寄贈雑誌受入数が若干減少した。

昨年度に引き続き、外国雑誌取次業者スエッツインフォメーションサービス社の倒産に伴う処理（債権確定

作業や、後継業者への発注もれタイトルについての処理など）を行った。また、雑誌の移管に伴うデータ修正も行った。

(12) システム関連業務

3名から2名にシステム担当が減員された。そのため業務の見直しと、適正で継続可能な業務内容と業務量を勘案しながら課題に取り組んだ1年であった。

管理コスト軽減のため、サーバの仮想化をすすめた。(高精細画像用サーバ、入館ゲート管理用サーバ) またローカルサーバで運用していたリンクリゾルバをASP (Application Service Provider) に切り替えた。どちらも安定してサービスを提供できている。

懸案であった経年劣化で不具合が度々発生していた業務機器の更新(中央図書館多目的ホールプレゼン設備、和泉図書館ライブラリーカード発行機、蔵書点検用スキャナー)及び装備作業用に新規でロールプリンターを導入した。導入後は大きな障害もなく、安定して稼働している。

(13) システムチームの他部署協力について

2015年度も継続してユビキタス e-learning (ユビキタス教育推進事務室) の認証システム、学習支援ポータルサイト (manaba folio) の認証システムを提供している。

大学全体の認証統合検討の検討会に加わり、すでに図書館で導入済の shibboleth について情報技術提供を行い、2016年6月に予定されている新システム導入のために大きく貢献した。

3.2 中央図書館事務室

中央図書館は、創立120周年記念事業の一環として新築され、2001年3月16日に開館した。街と人の記憶に融合するよう設計され、美しい内観と充実した設備を持ち、2002年日本図書館協会建築賞を受賞した。専任職員9名、短期嘱託3名、業務委託スタッフ25名(内、育休1)、総合インフォメーション6名、常駐業者2名計45名、学生アルバイト若干名で運営され、他の図書館事務室と連携して蔵書体系や図書館リテラシー教育の拡充を推進した。2016年3月11日東日本大震災5周年を迎えたが、震災時の当館概況については、『図書の譜』第20号97～100頁を参照。2016年度中に開館以来延べ入館者が1,300万人目に達する見込みである。

(1) 開館日数、図書費減額

前年度は予算削減で開館時間短縮(4/1～6/1は21時閉館、6/2から22時閉館に復旧)、入試期間休館(2/4～2/17)があったが、2015年度は予算がほぼ復旧し338日開館(前年度309日)。図書費は減額のため、学習用図書選定分科会で購入図書を見直すなど工夫した。

(2) アフリカ文庫の和泉図書館への移転

和泉図書館蔵書の個性化推進、中央図書館書架狭隘化の解消に資するため、アフリカ文庫(1979年セネガル共和国大統領レオポール・セダル・サンゴール氏から著書一式の寄贈を契機にアフリカ関係資料を収集した記念文庫。『明治大学図書館所蔵アフリカ文庫目録』『アフリカ文庫目録補遺版』参照)を2016年3月15～16日和泉図書館に移管した。その結果、地下3階自動書庫約12連が有効利用できるようになった。

(3) 入館者数・各種ガイダンス等

入館者数は645,278人(2014年度624,907人)だった。大学院新入生オリエンテーション、文学部3年次ガイダンス、留学生オリエンテーション、新任教員ガイダンス、専門職大学院秋季入学者(留学生)ガイダンス、共同プログラム短期研修生ガイダンス、図書館ゼミツアー(総参加者数620人)、各種の情報検索講習会、ガバナンス研究科・グローバルビジネス研究科図書館ツアー、司書講習図書館ツアー、オープンキャンパス図

書館ツアー等を実施し、「書評の書き方講座」「大学院生による論文相談会」も開催した。図書館実習生（他大学）を受託指導し、第二期図書館サポーターを受け入れ活動を支援した。

(4) 中央図書館ギャラリー展示

中央図書館事務室 6 名、図書館総務事務室 1 名のワーキンググループで展示活動を行った。教員や学内外関係者と連携し、メンバーが企画・渉外、解説・印刷原稿作成、列品、広報を担当し 5 回展示会を開催した。展示タイトルは p.22 「4 主要行事・イベント 中央図書館ギャラリー」参照。

(5) 各種イベント等の開催

利用マナー教育と読書推進活動のため、図書館オリジナルバッグのデザインコンテストを行い、最多得票のデザインでバッグを作成し学生に提供した。中央・和泉図書館合同ブックハンティングを開催した。第 6 回図書館書評コンテストは、図書館活用奨励と優れた書評を顕彰し読書活動を推進することを目的に開催され、応募作は、図書館有志の予備採点、選考部会の選考で受賞作が選定され、2016 年 1 月 30 日に表彰式を行った。

(6) 施設・設備の保守・管理

開館 15 年日となり、自動書庫部品交換及びリフター・オートドア・コンベア点検、ブックディテクションシステム (BDS)、防災管理点検作業、プレゼン設備保守点検等の定期点検のほか非常放送設備調査、非常用出口扉電気錠パニックオープン動作点検、ガラス防煙垂れ壁調査・補修、プレゼン機器リプレイス、マルチメディアエリアチェア 50 脚交換、閲覧用椅子 51 台クロス張替え、書庫内書架（中古）増設工事等があった。

(7) ローライブラリーと法科大学院生・法学研究科院生の利用

ローライブラリーは、中央図書館の開館日数より多い 343 日開館した。法学研究科院生も学生証の提示で利用できる場合がある。書庫の掲示ボード固定工事を行った。

(8) 国際交流への貢献

下記の図書館利用等を受け入れた。ノースイースタン大学共同プログラム、タイ諸大学共同プログラム、西シドニー大学共同プログラム、情報コミュニケーション学部短期学生交流プログラム、Meiji University Law in Japan Program、フィリピン・デ・ラ・サル大学、情報コミュニケーション学部短期学生交流プログラム（再）、日本語短期研修プログラム（夏期）、クールジャパンサマープログラム、Meiji University Law in Japan Program（再）、科学技術振興機構補助事業「さくらサイエンスプラン」、日本語短期研修プログラム（冬期）、国際交流基金関西国際センター等で昨年より微増した。

(9) 大規模災害への対応

2 月図書館合同研修で大災害を想定した「図書館における防災への取り組み」を行った。閲覧室に「シェイクアウト」周知ポスターを掲示し、書庫連絡通路に震災時の被害状況写真パネルを展示し減災広報に資した。大規模震災発生時の対応マニュアルを更新した。

(10) 懸案事項

各フロア辞書棚の整理、デジタル編集室・点字閲覧室書架の用途改善、書庫・自動書庫の明人文庫等の書架移動が進み、1 階低書架での文具提供は年度末で廃止した。2016 年 4 月から地下 1 階書庫を開架式化する予定。なお開架エリア・地下 2 階書庫・第三書庫・地下 2 階事務室の狭隘化解消、地下 3 階開架エリア書架増設、豪雨時の地下 1 階書庫浸水防止、K 階段の壁面クラック修理等が必要である。

3.3 和泉図書館事務室

新図書館開館4年目を迎え、2015年11月4日（水）15時に300万人口の入館者を記録した。年間入館者数は、前年度に比べて14,000人ほど増加しており、貸出冊数も6,000冊ほど増加した。全国各地からの見学者は落ち着いてきており、2015年度は、69件、631名（開館以後累積355件、2,568名）の見学案内を行い、自由見学者は1,500人以上であった。また、前年度に受賞した日本図書館協会建築賞に次いで、一般社団法人日本建設業連合会のBCS賞を受賞し、建築計画において総合的観点から高く評価された。

(1) 業務体制と人事政策

業務体制は、専任職員7名、嘱託職員1名、業務委託スタッフ21名で運営した。数字上は専任職員増員となったが、1名は2年間JUSTICEへ派遣しているため、実質は前年度と同数の6名での運営である。

(2) 図書館リテラシー教育・ガイダンスの改善

2014年度に異動で配属された職員も2年目となり、また2015年度に異動で配属された職員は、図書館業務に精通している者であったため、図書館ガイダンスの対応は比較的スムーズであった。件数も169件と前年度に比べて減ったこともあり、内容改善を検討することができた。

図書館リテラシー教育は、理想的には全学生に受講してもらいたいものではあるが、人員・施設の制限から、現在の図書館ガイダンスの方法では全学生への受講は現実的ではない。そこで、より多くの学生に対して、効率よく図書館リテラシーを身に付けてもらうため、図書館リテラシー講座のWeb化を検討した。「図書の探し方」「雑誌・雑誌論文の探し方」「図書・雑誌の利用」「データベースの活用」の4種類の入門講座を作成し、演習問題とともに図書館HPに公開した。これにより、図書館ガイダンスの予習・復習に役立てたり、図書館ガイダンスを受講できなかった学生への補完として効果を上げた。また、図書館ガイダンス時間内にこれらWeb講座を取り入れ、より効果的なガイダンスを検討した。次年度も引き続き検討を重ねていく予定である。

このほか、「レポートの書き方講座」「プレゼンのコツ講座」などを開催した。

また、大学院生によるナビ・ステーションをサーチアシストで実施し、9名の助手・TAが月曜日から金曜日まで担当した。

新入生に対するガイダンスでは、各学部新入生ガイダンスにおいて、図書館利用案内（約30分）を実施した。

(3) 特設コーナーの改善と読書推進

2012年度開館以来、特設コーナーには、新着本や、各種受賞作品、書評コンテストなどに取り上げられた図書のほか、語学や就職関係の図書、学生の購入希望により購入した図書のうち開架図書に配架できない図書などを配架してきた。3年度が経過し、特設コーナーの書架に余裕がなくなってきたことや、請求記号を付けない図書を配架していることで、本を探し出せないという事態が起きていることなど、特設コーナーの運用そのものを見直す必要がでてきた。

このコーナーの建設当時と本来目的に従い、目玉となるような図書をイベント的に配架し、読書推進を促すこととした。特に「教員お薦め本」コーナーでは、教員のコメントとともに図書を面置きすることにより、学生の関心を引くことに成功している。また、語学や就職関係の図書は実務・軽読書コーナーとして配架し、最新の版への差し替えなどを行い、常に新鮮な図書の配架を行うこととした。

(4) イベント・ギャラリー展示

イベント、ギャラリー展示については、別途全館まとめて記載しているので、そちらを参照されたい。とくに英語関係、日本文化関係のイベントに関心が寄せられた。英語関係では、2014年度に開催した「英語音読ワークショップ」を3回連続シリーズの内容で開催した。さらに新しい企画として、「CinemaでEnglish」を開催し、映画を使って生きた英語に触れる機会となった。「日本文化を知ろう」シリーズでは、「香道体験」を開催した。いずれも参加者多数で盛況であった。

(5) 館内サインの更新

和泉図書館のサインは建設当時からサイン計画として設置してきたが、運用上入れ替え可能な手作りサインについて、一新する計画を実施した。詳細については、『図書の譜』第20号に報告を掲載している。2015年度は、書架の側板のサインを一新した。サインの内容をカテゴライズし、フォーマットを定め、利用者にわかりやすくしただけでなく、管理運用も効率よくできるようにした。

(6) 杉並区図書館ネットワーク・世田谷区立図書館との連携

杉並区民・区内協定校のライブラリーカード発行枚数は327枚、世田谷区民のライブラリーカード発行枚数は125枚となり、いずれも前年度より増加している。杉並区民、世田谷区民の利用について、2015年度から閲覧利用のみの場合でもライブラリーカード発行による利用へと変更したが、特にトラブルもなく移行できた。

なお、地域住民の利用について、未返却のまま連絡が取れなくなるケースや、汚損の弁済に応じない利用者が増えてきているため、区立図書館と共に対策を講じる必要がある。

杉並区図書館ネットワーク講演会

「昔話の世界 西欧・中国・日本のシンデレラたち」

【日 時】 2015年10月3日(土) 14:00～16:00

【場 所】 杉並区立中央図書館

【講 師】 立石 展大(高千穂大学人間科学部教授)

社会連携事業の一環として、杉並区及び世田谷区の中学校から職場体験学習を受け入れた。

3.4 生田図書館事務室

2013年度以降、生田キャンパス在籍の副館長、理工学部・農学部図書委員、両学部の全学科から選出された教員による学習用図書選書委員とともに進めてきた生田図書館の読書支援が定着し、学生たちは専攻する分野以外の多様な分野の本を読むようになってきた。従来、生田ではベストリーダーのトップ10は自然科学の専門書が占めていたが、最近では専門書に混じり、手にとりやすい国内外の小説や新書、美術、芸術、旅行記、世界の宗教や民族、紛争、ジェンダーや憲法など、多様な本の貸出が増えている。ギャラリー展示企画者による関連図書リスト作成と配布、特集図書コーナーや話題の本コーナーでは職員だけでなく業務委託者も選書に参加している。コスパでも予め講師から推薦されたテーマ関連の本を会場のギャラリーZEROに配架し、当日来た学生に図書リストを配布している。毎週1回見計らい図書が届くと学習用図書選書委員に連絡するが、教員が楽しみながら選書している。教員は多くの本を読んできているので、読み手の顔を浮かべながら本を選ぶ楽しみを知っており、生田図書館の読書支援は副館長を筆頭に理工学部・農学部の教員に支えられるところが大きい。明治大学図書館の収書方針を順守しつつ、自然科学の本だけに限定せず、様々な分野の蔵書を収集してきたことが、学生時代の読書習慣を育む一助となっている。

2015年度は受講者が減少している生田キャンパス開講の「図書館活用法」について、理工学部、農学部の3年次進級要件、両学部の時間割や食料環境政策学科の初年度導入教育「基礎ゼミ」、ゼミ単位のオーダーメイドで対応する「ゼミガイダンス」等図書館活用法以外の図書館リテラシー教育を受講者数、授業プログラム、そして図書館活用法を立ち上げた元副館長の齋藤哲先生の図書館紀要論文等多くの資料を揃えた上で、副館長、理工・農学部図書委員、生田図書館のリテラシー業務担当職員で詳細に検討し、生田で開講されている図書館活用法について2015年度でやめるという提起を行った。生田の検討結果は8月の図書館スタッフ研修で討議し、2016年度1年をかけて館内で検討することとなった。2000年度開始の図書館活用法から15年を経た今、インターネット環境が当たり前となり、電子ジャーナルに代表されるように学術情報も紙から電子へとその変化の速度は著しい。生田からの提起が学習環境の変化と各キャンパスの学部、学年構成、カリキュラムを踏まえた上でのリテラシー教育の再構築に繋がることを期待する。

投書は館内の様々な問題に気づかせてくれる利用者の生の声である。試験期に閲覧室の二酸化酸素濃度が基準値を大きく上回ることに気づかせてくれたのも学生からの投書である。この投書をきっかけとして関係部署に働きかけ、2015年1月の定期試験期から法定環境測定を実施してもらうこととなり、少しずつ改善のための方策を実施している。

2014年度から2016年度まで3年連続で特定課題推進費（旧政策経費）で申請した「生田図書館のアクティブラーニング化」は、現時点で実現していない。

滞在型キャンパスの生田で長時間図書館で過ごす学生たちのために、2015年度は老朽化した第一開架の閲覧机、第三開架の机と椅子の入替、雑誌コーナーに身障者用机と椅子を設置し、身障者用リフトの設置、書籍落下防止装置の設置も行った。

(1) 施設工事・環境整備

昨年に引き続き、神奈川県立高津養護学校からインターンシップの生徒が生田キャンパスの清掃担当者の指導のもとで、図書館1階、2階の外ガラス清掃を行った。障がいを持つ生徒たちが働く姿は、周囲への教育効果も期待できる。8月には身障者対応リフト（車いす式階段昇降機）1台を新たに設置し、2007年度設置済の身障者対応リフト1台と合わせて、生田図書館内に2台設置された。9月には第一開架閲覧室用の机及び第三開架閲覧室用の机と椅子を新規に購入、更新した。3月には地下2階保存書庫のメンテナンスとしてカビ取り及び薬剤の噴霧を行った。また、生田図書館防災対策として、館内一部書架に書籍落下防止装置を設置した。

(2) 展示ギャラリーの運用

2015年度は13件（学部・研究科等企画9件、図書館企画3件、他1件）の企画展示を開催した。内容は学部生・大学院生の作品発表、教員・研究室・ゼミナールの研究及び活動成果発表等。詳細はp.23「4 主要行事・イベント 生田図書館ギャラリー「Gallery ZERO」」を参照。

(3) ガイダンス及び図書館リテラシー教育の充実

4月1日から4月8日まで行われた理工学部、農学部の新入生指導週間行事日程の中で、理工学部2回、農学部1回の新入生図書館利用ガイダンスを実施し、4月3日には新任教員図書館利用ガイダンスを実施した。新入生歓迎行事の一環として、4月1日～17日までの2週間、館内で行ったスタンプラリーには計34名が参加した。

次に年間を通じてのリテラシー教育活動として、24回のゼミガイダンス（含・グループガイダンス、出前講義）に計344名が参加したほか、5月11日にはWeb of Science 講習会入門編を開催し23名の参加があった。

また秋学期に生田就職キャリア支援事務室との共催で実施した「日経テレコン講習会」（全8回、11月20日～12月15日）では、122名の参加があった。

なお、2015年度も農学部からの依頼により、食料環境政策学科の初年次教育科目「基礎ゼミ」（受講者143名）に図書館職員4名を派遣し、「図書館利用法と新聞記事検索演習」「図書館を活用したレジュメ・レポート作成と文献検索演習」の2コマ計8回の出張講義を行った。

(4) 学習用図書選書

2014年度に学習用図書予算が大幅に削減され、2015年度もほぼ横ばい状態となった。そのため引き続き継続図書の見直しや、他館との重複購入を避けたり、高額な図書は買い控えるなど節約選書を行った。

一方で生田図書館運営の柱である「読書支援」については、日々のニュースや新聞の書評欄、書店・出版社のホームページ等で情報を集め、話題作は確実に購入した。

学生によるブックハンティングは6月6日（土）に実施し、101冊を購入した。

(5) 特集コーナーの企画

期間毎に設定したテーマについて関連資料を新着図書コーナー隣の書架に配架し、利用者に読書に親しんで

もらう機会とした。2015 年度は以下の 9 企画を実施した。

おいしいお話	4/13 (月) ～ 5/14 (木)
ひとりで悩まないで	5/15 (金) ～ 6/23 (火)
旅に出ようよ	6/24 (水) ～ 7/20 (月)
ブック・ハンティング	7/21 (火) ～ 9/24 (木)
アートな国ニッポン	9/25 (金) ～ 10/25 (日)
恋愛書のススメ	11/5 (水) ～ 11/30 (月)
酒の本	12/1 (火) ～ 1/7 (木)
珈琲のお供にライトノベル	1/8 (金) ～ 1/31 (日)
スタッフおすすめ本	2/1 (月) ～ 3/31 (木)

(6) 読書のススメ (話題の本) コーナーの企画

新聞見出しに頻出する記事や web での話題から生田図書館の蔵書をピックアップし、学生の読書へのきっかけを提供した。2015 年度は以下の 17 企画を実施した。

話題の原作本	4.14 ～
頻発する異常現象	4.27 ～
箱根山	5.22 ～
2015FIFA 女子ワールドカップ開幕	6.4 ～
台風シーズン到来	7.14 ～
安保関連法案	7.23 ～
マイナンバー	9.9 ～
ノーベル賞	10.6 ～
ノーベル文学賞	10.23 ～
福島の「今」	11.16 ～
冬空への誘い - 空・星・宇宙 -	12.1 ～
第 92 回箱根駅伝	12.16 ～
日本・ベルギー友好 150 周年	1.15 ～
春休み! こたつでのんびり猫の本	2.1 ～
各界で耀く先人たち - 明治大学 OB・OG -	2.17 ～
桜特集	3.1 ～
翻訳家 柴田元幸	3.16 ～

(7) 川崎市図書館との相互協力

2014 年 1 月に川崎市立多摩図書館長の呼びかけで始まった多摩区 3 大学図書館(明治, 専修, 日本女子大学)・川崎市立多摩図書館連携状況連絡会議は, 2015 年度は以下の 2 回が開催され, 各図書館の近況ならびに地域連携の現状が披露された。

7 月 14 日 (火) 会場: 日本女子大学西生田キャンパス図書館

3 月 8 日 (火) 会場: 川崎市立中原図書館

2015 年度も多摩区広報などへのギャラリー ZERO 展示のお知らせ掲載や多摩図書館から川崎市民への積極的な広報もあり, 前年度に比べ川崎市民の入館者数は約 500 名増加しており, 生田図書館の地域連携は成果を伴いながら定着してきている。図書館を利用する川崎市民が, ギャラリー見学やコスパへ参加することも珍しくない。2011 年度からの統計推移は以下のとおりである。

	2011 年度	2012 年度	2013 年度	2014 年度	2015 年度
LC 作成数	58 名	58 名	70 名	47 名	67 名
入 館 者 数	4,046 名	3,788 名	3,668 名	4,748 名	5,240 名
貸 出 冊 数	2,061 冊	2,452 冊	2,689 冊	2,506 冊	2,534 冊

3.5 中野図書館報告

2015 年度は中野図書館開館から 3 年目であった。中野キャンパスの学生数は、総合数理学部が 3 年生まで入り、2014 年度の約 2,400 名から約 2,700 名に増加した。

蔵書数は、2014 年度末に 41,328 冊であったものが、1 年後に 45,854 冊となり 4,526 冊増加した（簿外図書を含む）。2014 年度は 8,000 冊以上増えていたが総合数理学部の設置経費図書購入が終了したためか、増加冊数は減った。中野図書館の収容可能冊数は当初 46,000 冊としていたが、ほぼそれに到達してしまった。棚板増設後に棚板総延長から算出した収容冊数は 51,900 冊である。図書館内で合意されている中野本の生田保存書庫移転を 2016 年度中には実施することになりそうである。

延べ入館者数は学生数の増加割合以上に増えた。2015 年と 2014 年の 4 月の入館者数内訳を比較してみたところ、新入生の入館が増えただけでなく、3 年生の入館も増えており、1 年生の時から中野図書館を使ってきた学生の利用定着度が高いと推定した。座席の利用率は定期試験前は飽和状態の時が増えて、総合数理学部の完成年度を待たずして座席数の不足が顕著になってきた。

(1) 開館運営状況

2015 年度は日・祝日開館を再開した。延べ入館者数は 146,079 名であった（昨年度比 12.5% 増）。貸出冊数は 40,610 冊であった（昨年度比 10.6% 増）。学生 1 人あたり平均貸出冊数は約 13 冊で昨年度と同じである。他キャンパスからの配送件数は同程度で 3,946 件であった（生田保存書庫分を除く）。

2014 年度から始まった山手線コンソーシアム利用者入館者数は延べ 438 名で 50 名ほど減った。一方、リパティアカデミー（会員証、ライブラリーカード）は 5,252 名で前年度の 1.5 倍、校友は 9,420 名で 1.2 倍に増えた。

(2) 蔵書について

2015 年度中野図書館学習用図書予算で購入した図書は 3,963 冊で、予算減の分だけ 2014 年度より少なくなった。設置経費図書購入は、国際日本学研究科 232 冊であった。英語リーダーは使用頻度がとても高く傷みも激しいので、よく使用されるピアソンリーダー（旧ペンギン）のレベル 3～4 などを毎年購入することとした。

学習用雑誌は学生から希望があったソフトウェアや Web 関係の 3 タイトルを追加した。

蔵書増加への対応として、参考図書を集密書架に移動し棚数を増やし、7 段ある書架の一番上の段も一部使用を始めた。

除籍冊数は、1,124 冊であった（簿外を含む）。

(3) 各種ガイダンス・イベント等の実施

2015 年度、各種ガイダンスでは「文献管理ツール EndNote の使い方」と「レポート・論文の注、引用、参考文献リストの作り方」を新規に実施した。

また、「企業情報の探し方」は毎年実施してきたが、2015 年度は就活時期に合わせて 2 月下旬に 5 日間通しで、「業界・企業研究データベース講習会」として実施したところ、参加者合計が 71 名と多く、好評であった。

イベントとしては、ブックハンティング 1 回（3 名参加）、としょかん福ぶくろ（図書館バックにスタッフが選んだテーマ本を入れる）配布などを実施した。

読書・貸出推進としては引き続き、オススメ本棚にスタッフがテーマを決めて関連図書の展示を通年行った

(計 18 回)、『図書たより』を 8 号から 14 号まで発行した。『図書たより』の執筆は 2015 年度から業務委託者にも参加してもらい、全スタッフで取り組んだ。

(4) 最後に

昨年度同様、新年度の授業が始まって 1 日の入館者数が延べ 900 人を超える日が出始めた。入館者数は今のところ昨年度比で 5% 程度増えている。日中、一人席はほぼ満席になる時間帯があつて、定期試験前のようなものである。静寂できれいな学習環境としてニーズが高いのだが、座席数の不足が決定的である。可動式テーブルは 1 台につきイスを 3 つ置いているが、ふつうは一人で使われるので、ラウンジを除いて 128 席が実際の席数とも言える。これは 2016 年度中野キャンパス学生数の 4.1% 程度である。正式な 160 席と比しても 5% 強である。開館当初、Ⅱ期工事等の進展がなければと予想したことが現実となっている。書架スペースもしかりである。大学図書館として物足りない感を否めない。

しかし、あきらめてはいられないので、課題として次のようなことをあげる。

(1) 人的サービスの充実（カウンターサービス、情報と文献の探し方支援・教育、レポート・論文作成の支援・教育、図書館活用法の授業、館内環境のきめ細かい管理など）

(2) 限られた蔵書数で充実度を高めること

(3) 電子資料の利用促進

(4) 同じキャンパス内に蔵書の一部を置ける施設

開館して 3 年、安定どころではない。